慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（33353）1211（大代表）

平成24年度入学式

医学部112名が入学

さる4月2日、平成24年度慶應義塾大学入学式が、日吉記念館にて執り行われた。昨年度の入学式は、震災や停電の影響により1か月遅れての開催となったが、今年度はそのような心配もなく、4月の穏やかな陽気に包まれての開催となった。

会場の日吉記念館

天候に恵まれたこともあって、日吉キャンパスには大勢の人が押し寄せ、活気に満ちあふれていた。

式典は午前と午後の2部構成で行われ、医学部は看護医療学部や薬学部とともに、午後の部への参加であった。初めに、学事報告が行われ、各学部の入学者数が発表された。本年度の入学者数は6656名、うち医学部は112名、看護医療学部104名、薬学部が227名であった。前年度に比べ、慶應義塾全体での入学者数が1000人ほど減少し、医療系学部の入学者数も減少傾向となった。医学部入学者は、前年に比べ5名の減少であった。

清家塾長

続いて、清家篤塾長により式辞が述べられた。塾長は、昨今「大学における顧客サービス」という言葉を耳にするが、慶應義塾では新入生をお客様扱いするのではなく、むしろ一人の仲間として迎え入れたい、と語った。塾生一人一人が、慶應義塾が良い大学であるための重要な役割を担っており、それゆえ互いに尊敬し合える友人を見つけて高め合ってほしい、と述べた。

式辞に引き続き、壇上の各学部長が一人ずつ紹介された。教職員代表祝辞では、細田衛士経済学部教授が、適塾の例を挙げて「がむしゃらに勉強する事」の大切さを説いた。江戸末期の社会混乱の中では、蘭学を学んだところで将来が約束されるわけではなかった。しかし、若者は不安を抱きながらもがむしゃらに勉強し、結果的にこの時の猛勉強が、後の日本を大きく変えることになったのである。さらに、福澤諭吉の説いた「目的のない勉強」に触れて、学ぶことの面白さは予期せぬ時に得られる事が多いから、知的好奇心に従い幅広い分野を勉強してほしい、と述べた。

また、塾員代表祝辞として、大橋光夫昭和電工株式会社相談役から、30年後に社会で最も活躍している時期の自分をイメージして、今日これから第一歩を踏み出してほしい、との言葉が送られた。大先輩から新入生へのアドバイスとして、長期思考を持つことの大切さが、様々な経験談を織り交ぜて伝えられた。

新入生代表による入学の辞では、環境情報学部の内海翔太君が、現在日本は先の震災からの復興の中にあり、この様な時代に日本を先導していけるような人物に我々はならねばならない、との抱負を語った。

新入生6656名の、これからの活躍に期待したい。

（5年　吉川裕紀）

第7回 白衣式

決意新たに、臨床実習へ

北里講堂前での集合写真

さる3月24日、平成23年度白衣式が、本塾北里講堂にて執り行われた。白衣式は、1993年、米国コロンビア大学で行われたのを初めとし、臨床実習に臨む医学生にプロフェッショナリズムを意識させるための行事として、今や世界中の医学部で実施されている。本塾では、2006年に第1回の白衣式が行われ、今年で7回目を迎える。

式典には末松誠医学部長をはじめ、武田純三病院長、笠原忠塾常任理事、比企能樹三四会長らが列席し、臨床実習を控えた93回生103名に、祝辞が贈られた。また、来賓として迎えた伴信太郎日本医学教育学会理事長より、餞の言葉を賜った。伴氏は、医師を目指す上で、「患者・家族の気持ちに共感できる人となること」、「良き教育者となること」、「懐の深い開拓者となること」の三つが大切であると述べ、幕末の偉大な教育者、吉田松陰を例に挙げ、理想的な教育者と学習者の関係は、ひいては医師と患者の関係にあたることを語った。

三四会長、医学部長らから白衣を授与された

そして、いよいよ白衣の授与である。参加した学生一人一人が教員に白衣を着せてもらい、真新しい白衣を着た学生がずらりと並ぶと、会場からは大きな拍手が沸き起こった。なお、今年は例年にも増して父兄の参加が多く、会場の北里講堂に入りきらないほどであった。その後、93回生103名により、『誓いの言葉』が唱和された。

『誓いの言葉』は、93回生有志により組織された白衣式委員会を中心に、クラス全員が協力し、数カ月をかけて考え出されたものである。103名が声をそろえて誓いの言葉を読み上げると、会場からはより一層大きな拍手が沸き起こった。最後に、平形道人医学教育統轄センター長が閉会の辞を述べ、白衣式はお開きとなった。

今回の白衣式を経て、93回生一同は医のプロフェッショナルとなるべく、決意を新たにした。この『誓いの言葉』を胸に刻み、臨床実習に励んで行きたい。

（5年　吉川裕紀）

93回生 誓いの言葉

共感の心を持って、謙虚な姿勢で、目の前の命と真剣に向き合うことを誓います。

常に向上心を忘れず、周りと支え合い、安全かつ専門的な医療を追求することを誓います。

生まれくる命を尊重し、心身の健康を伝え、社会に貢献することを誓います。

新入生に贈る言葉

平成24年度医学部新入生諸君へ「ひとのために生きる」

三四会会長　比企　能樹（外37回）

慶應義塾大学医学部にご入学、心よりお祝い申し上げます。

諸君は「医」を学ぶ第一歩を踏み出されたわけでありますが、この年に晴れて慶應医学の一員に成られたことは、誠に重要な意義があります。それは記念すべき年に入学されたということで、すなわち諸君が6年生となる時に、この医学部が創立100年目を迎える時に至るからです。一世紀を遡る1917年にわが医学部は、福澤諭吉先生と北里柴三郎博士によって開設されたました。お二人の事は、既によくご存じでしょうが、このお二人は、近代日本の夜明けに国を牽引されたパイオニアかつオピニオンリーダーで、それまで我が国の医学教育を国立の大学を主軸においておりました。感染症の原因究明がなされていなかった当時、医学先進国であったドイツで学ばれた細菌学、免疫学を引っ提げて帰国された北里博士に、国立の施設から研究の場を与えられず、いわば知的財産を抱える浪人となられました。その時、福澤先生が手を伸べられ、私学での医学教育・研究の場としてわが医学部を創設することを、北里博士に託されたのです。

北里博士に始まった伝統の医学を、本日より諸君は存分に学び、その知識を持って更なる未知の医学に挑戦し、飛躍して頂きたいを思います。そういう医学部に学ばれる喜びと幸せを、どうぞしっかり噛み締めて下さい。

この機会に諸君に一つだけ、お願いをしておきたいことがあります。

諸君がここに入学を許されるには、非常な難関を経て、苦労して、ようやく今日あることは言うまでもないのですが、その苦労は、今日限りで一端忘れて下さい。医学部に入ったからと言って、諸君は決して偉くなったわけでもなく、立派になったのではなく、未だ孵化もしない卵です。従ってここで休止符を打つのではなく、当然ながらこれまで以上に懸命に勉強をし、学問をし続けなければなりません。しかし医学だけではなく是非とも、人として、一人前になることを、目指して頂きたいと思います。

私共は、医師を志す者は「自分の為ではなく、人の為に生活し、自分を捨てて　人を救おうと願いなさい」と、学んできました。一見簡単な言葉ですが、これを行うのは非常に難しいことです。どうぞ心の隅に、この言葉を刻んで、これからの学生生活を送って頂きたいと、願って止みません。

私たち慶應義塾大学の医学部同窓会、即ち三四会としまして、君たちを後輩に迎えましたことを、何よりの誇りと思います。

本当におめでとうございました。

新入生に望むこと

慶應義塾　常任理事　戸山　芳昭（整54回）

医師を目指して本塾医学部に進まれた97回生の皆さん、ご入学誠におめでとうございます。慶應医学は1917年に医学科予科としてスタートし、1920年に大学病院が開設され、北里柴三郎博士が初代医学部長、病院長として慶應医学の基礎を作り上げ、今日に至っております。

慶應医学の原点は、創設当時に北里博士が示された「我等の新しき医科大学は、多年医界の宿弊たる各科の分立を防ぎ、基礎医学と臨床医学の連携を密にし、学内は融合して一家族の如く、全員挙って斯学の研鑽に努力するを以って特色としたい」にあります。その後、慶應医学は多くの先輩たちの努力により、わが国屈指の医学府へと大きく発展を遂げてまいりました。特に、2001年に完成した総合医科学研究棟（通称、リサーチパーク）を中心に基礎・臨床一体型研究が積極的に推し進められ、大型の研究費獲得や最先端医学研究機関として国からも認められております。中でも、脊髄や心筋、角膜などの再生医学、幹細胞生物学分野では世界最先端の研究が進められております。これらの研究は、まさに北里博士が示した基礎・臨床一体型による臨床応用を目指した研究であり、今後の更なる発展が大いに期待されているところです。

さて、新入生の皆さんが卒業を迎えるころ、慶應医学も創立百年となります。次の慶應医学百年の第一歩を、皆さんが医師として踏み出すことになります。そのために現在、慶應ではソフト・ハード両面での改革を積極的に進めているところです。その中核となるのが、建設が予定されている「新病院棟」です。皆さんが医師として活躍する頃には、何とか新病院棟が竣工し、新しい大学病院での研修が行えればと考えております。

最後に、一人の医師として、教育者として、指導者として学生や教室員に常に話していることを皆さんにお伝えし、「新入生に望むこと」と致します。それは、「病気、学問には厳しく、患者さんには優しい医師を目指しなさい」「心・技術・科学の3つをバランスよく持ち、国際感覚を身に付けた医師を目指しなさい」「何事も一生懸命努力しなさい。そうすれば必ずどこかで、誰かが認めてくれている」「自分の力をしっかり見極め、過信は慎みなさい」「若いうちは、迷ったら自分にとって辛い方、大変な方を選びなさい」「辛いことでも、どうせやるなら楽しく、前向きでやりなさい」です。どうか、上記6項目を常に忘れずに、楽しい学生生活を、悔いのない学生生活を送って下さい。

自我作古の精神で医学を楽しもう

医学部長　末松　誠（医化62回）

97回生の112名の諸君、ご入学おめでとうございます。

慶應義塾大学医学部・病院は、2017年に創立100周年を迎えます。今年は医学部・病院創立95周年、諸君が最上級学年になる時が、創立100周年の2017年春ということになります。北里柴三郎博士を初代医学部長・病院長として1917年に我々の学び舎が創設されて以来、「基礎・臨床一体型の医学・医療の実現」という素晴らしい建学の理念の下、先輩の先生方は常に研究と実践、理論と応用の両輪を体現してきました。次の100年に向けた新たな飛躍を目指して、私達は教育・研究・臨床の領域で新しい取り組みに挑戦しています。加えて世界のトップレベルの機関との連携により、幹細胞医学、代謝システム生物学の領域で先導的な教育、研究を実践してきました。諸君には基礎医学・臨床医学の最新の知識を吸収し、「自我作古（われよりいにしえを作る）」の精神で、自分自身が見つけた新しい発見や自らの創意で生み出した医療技術開発などを創出できるphysician scientistとしての夢を大きく膨らませてほしいと願っています。ぜひ頑張ってください。

70歳以上の方々の医療費が国の防衛予算の10倍にも跳ね上がるとも言われている2030年には、諸君が医師としての技量と自身をつけ医療イノベーションを創出する、あるいは後輩の育成に自身の経験を植え付け、技術を伝承していく世代になっているはずです。これらの研究成果と人材育成の成果を、超高齢化社会に包括的に社会の要請に応える医療の実践に結び付ける重点領域の一つとして我々は「がん制圧」を旗印に挙げています。そのために建学の精神を具現化し、医学・薬学・看護の連携によるグループアプローチを実践できる人材を育成するべく、教育研究インフラのさらなる充実を図っています。諸君も今日からそのチームの一員であり、そのためには医師、看護師、薬剤師、すべてのcomedical staffが「一身独立」という塾祖福澤諭吉の教えを守り、「自ら考え実践する人材」となっていただきたいと思います。独立心のある医学研究者・医療人の結集により、周囲のスタッフと連携して真に患者さんのための医学・医療の最強チームの一員となるべく研鑽を積んでください。

宮城県石巻市より震災後1年を経て

鈴木皮膚科医院　鈴木　明宏（59回）

石巻市の僕の診療所と家は海から2キロ、北上川のすぐそばに建っています。去年の震災で被災したのですが、診療所は基礎をしっかり作った密閉構造のため10㎝程度の浸水でした。職員2人の小規模な診療所のため、被害はエアコン室外機2個くらいでした。電気、水道、電話などの復旧が遅れ、再開に2ヶ月を要しましたが、実際に職員と復旧のために作業したのは3日程度でした。

家は診療所の近くの川岸に建っているのですが、こちらは40畳で天井高7mの美しい響きのコンサートホールを持つ家で、さらに建物全体が響くようにと巨大な地下室（60畳ほど）を有しています。これがうまく働き、震災の津波の水はすべて地下に流れ、建物の中は1部屋が1、2㎜浸水した程度でした。地下に100トンほどたまった水をポンプでくみ出し、今は普通に住んでいます。食器も1枚も割れませんでした。

僕の建物は幸運にも、被害が少なかったのですが、町内のほとんどの建物は全壊で、今は4分の1程度しか残っていません。建築も許可されない地域のため、どんどん殺風景になっています。近所は空き地だらけです。

被災地の復興計画は一向に進む気配がありません。簡単な区画整理でも10年かかるというのに、広大な地域を1ヶ月で大まかな計画を作り、10年で完了予定というのですから無理な事です。震災後1年後でも、実情は家の解体、がれきの積み上げだけで新しい建物は全く建っていません。高台、内陸への集団移転といっても何万人をまとめるなんて不可能なことです。

ほとんど無傷で済んだ診療所

石巻市の復興計画はどうも東京の都市設計コンサルタント会社に丸投げのようです。この手の会社は、要するに大規模な計画を作れば作るほど利益が出るので、絵だけきれいなものを描いて売り込むわけです。歴史も文化も無視した絵なのですが、驚いた事に市に簡単に採用されました。その復興計画は実は他人事ではなく、僕の診療所も家も引っかかってしまいました。家は堤防になり、診療所は拡張された道路になるそうで、いずれは立ち退きです。僕の家の地盤は強固なのですが、周囲の地盤は悪く、地震津波で完全に陥没したのに、地盤が良いところにしか造れないタイプの堤防を造ると聞き、また驚きました。こんどは堤防こそ危険なわけです。

待合室はきれいだが、植物は泥で全て枯れた。内装などの修理は6月にようやく開始予定

今の診療所は看板もなく、少人数の患者を想定したものですが、震災で周囲の人口が激減してしまいました。近くの小学校の今年の新入生は男女合わせて5人（以前の15分の1）とのことで本当の意味で過疎地です。となると、患者数も激減するのかと思うと以前より増えていたりするので、診療所の場所なんてどこでもいいようです。あまりにデタラメな復興計画を見せられたり、希望を失った人々と毎日接することは本当に疲れます。普通の感覚を求め、石巻から離れる事も考えていて、週末になると次の候補地を探すためと自分に言い聞かせて、あちこち車で出かけています。少し寂れた場所が土地も安いし、仕事も楽でいいかな、なんて考えているので呑気なものです。

診療所は無事だったが裏通りは津波でほとんどの家が壊れてしまった

鑑賞知来

3月、128三田会大同窓会に参加する機会を得た。卒業式での卒業25年塾員招待会の直前に開かれるリユニオンの場である。年度末の日曜日の午後、卒業生7000名余のうち1845名が集った。史上最多であった。なぜか？第一には、幹事達の地道な努力があった。いつの時代にも、人の輪の中心にはこうしたリーダーの存在がある。ちょうど仲間が集いたくなる年頃でもある。第二は、ソーシャルネットワークサービスの存在である。Facebook上で次々に、旧き仲間達がつながり、再会を喜ぶ流れの中に身を置きながら、「情報」のもつ力を実感した。同時に、次の25年について多くの示唆を与えてくれた。

地域や職域の現場で人々の「健康」と向き合う日々から得た経験からも、健康や予防への社会の意識とニーズは高い。信濃町にも予防医療センターが立ち上がろうとしている。いまこそ慶應医学は、healthの領域でも旗を掲げ、先導者の役割を果たすべきと考える。WHOの定義でも知られるようにhealthという語の持つ意味は、幅広く奥深い。その中で、サイエンスとエビデンスに基づいたhealth研究で社会を先導していくことが我々のミッションである。しかし先導者たるには、殻に閉じこもらない、cross-cuttingなアプローチが必要である。一つは既に述べた「情報」。さらに、「コミュニケーション」や「スポーツ」。それぞれの専門家と我々が同じ目標に向かい、異なる視点で協働する必要がある。また、社会格差の健康への影響が懸念される現在、成果を公平な社会の実現に役立てるために、「社会制度設計」の専門家との協働も不可欠である。幸い義塾には、これらを担う多様で優れた人材が揃っている。「地に足のついたコミュニティの視点をもちながら、サイエンスの力をフルに活用し、healthの領域にイノベーションをもたらす」ことを目標に、社中一致して前に進むべき時が到来したと強く感じる。

（衛生学公衆衛生学　武林亨　68回）